診療室

トキ保護センターの現場と課題

和食雄一[†]（新潟県佐渡トキ保護センター主任）

2008年9月に飼育下のトキ（*Nipponia nippon*）が野生下へ放鳥（再導入）され，27年ぶりに佐渡の大空にトキが飛翔した．その後，2009年9月，2010年11月にも放鳥が行われ，計42羽のトキが野生下に再導入されている（2011年3月にも第4回目の放鳥を予定）．

トキは江戸時代には北海道から九州まで広く生息しており，中国，東部シベリア，朝鮮半島，台湾にも生息が確認されていた．

しかし明治時代以降，乱獲や生息環境の悪化により生息数が激減し，1981年に日本の野生下からその姿を消した．野生から保護した個体間で人工繁殖を試みたものの全て失敗に終わり，ついに2003年日本産のトキは絶滅した．

中国でも1964年を最後に生息が確認できなくなったが，1981年に7羽のトキを再発見，その後の保護政策が功を奏し，2010年現在，飼育下で約600羽，野生下で約1,000羽のトキが生息している．

日本産のトキが絶滅する以前の1999年，ヨウヨウとヤンヤンの2羽（ペア）が中国から寄贈され，同年このペアで初めて人工繁殖に成功した．その後，現在に至るまで計3羽が中国から新たに供与され，人工繁殖も軌道に乗り，2010年12月現在の日本の飼育下での個体数は158羽に至っている．

佐渡トキ保護センターでは本所（飼育繁殖）に獣医師が1名（著者），分室として野生復帰ステーション（再導入のための訓練及び放鳥）に獣医師が2名配置されているが，獣医師といっても繁殖，飼育，訓練，放鳥といわゆる飼育員の仕事が大部分を占めている．獣医学的によくあるトラブルとしてはケージ等への衝突による頭部の損傷や慢性関節炎（変形性関節症），趾瘤症等が目立つ．他にもミオパシーや総排泄腔脱，ビタミンB_1欠乏症等が挙げられるがこれらは適切に治療すれば予後はかなり良好といえる．こういった獣医師本来の仕事である診療や病理解剖も当然こなすが，トキの場合，いかに傷病個体を出さないか，つまり「予防医学的な飼育」が最重要だと認識している．というのは，トキ（おそらく鳥一般）の場合，「様子がおかしい」時点でかなり病状が進行しているか，もしくは前日まで（視診的に）何ともなかった個体が朝には死亡しているといったケースが大半を占めるからである．また，血液検査やX線検査といった諸検査や治療を施す際には，捕獲のリスクとのバランスを十分に考慮しなければならない．捕獲（トキは臆病かつ神経質な鳥）することは物理的なリスクが高く（捕獲時またはケージに戻す際に衝突等で死亡した例が過去に多数存在する），また捕獲や保定のストレスによるダメージ・死亡の可能性も十分熟慮しなければいけない点，犬猫とは違った難しさがある．

本所で飼育繁殖した個体のうち，選抜された個体が野生復帰ステーションで訓練を受ける．自然に模した大ケージで，採餌，飛翔といった訓練を行うわけだが，2010年3月に忌まわしい事件が起きた．テンがその大ケージに侵入し，トキ9羽が捕殺されたのである．これには様々な複合的要素が関わっている．ケージの構造のずさんさ，放鳥時にトキがケージから外に出る際の先導役としてアイガモを導入していたこと（アイガモが産卵した卵が誘因？），訓練中のトキが飛翔能力の未熟な初期段階であったこと等である．マスコミからはケージの構造や管理のずさんさのみが報道されていたが，いずれにせよ飼育現場の人間として恥ずべき事件で猛省している．

放鳥後の課題も山積している．まず放鳥した個体が群れにならず（第2回の放鳥個体は最大14羽の群れになったが），本土に渡ってしまった個体もいる．これは放鳥の方法や時期，餌環境など様々な原因が推測できるが決定的な要因は現在のところ不明である．また2010年には野生下で5組のペアの産卵を確認したが，いずれも

和食雄一

—略　歴—

2004年　日本獣医生命科学大学卒業

同　年　小動物病院勤務
　　実験動物施設勤務

2005年から現職

† 連絡責任者：和食雄一（新潟県佐渡トキ保護センター）
〒952-0101　佐渡市新穂長畝377-4　☎0259-22-2445　FAX 0259-22-4148
E-mail : wajiki.yuichi@pref.niigata.lg.jp

無精卵（もしくは初期の発育中止）で孵化には至らなかった．これもGPS送信器（位置情報を伝達）の背中への装着の影響（交尾の成功率に対する影響を飼育下で試験中）など様々な原因を推測しているが，いずれにせよ推測の域を出ないままである．

もう一つ慢性的な課題がある．それは職種や組織の「壁」である．佐渡トキ保護センターには林業職（行政職）と獣医職（飼育現場）が配置され，お互い絶対不可欠な存在であるが，それぞれが専門的職域であるためにその専門的知識や，言葉での表現が難しい「経験」,「勘」,ときには動物に対する感情論を理解し合うのは大変難しい．さらに，このトキ保護増殖事業というのは新潟県が環境省の委託を受けて成り立っており，最初の訓練の開始時には，野生復帰ステーションに環境省の出先機関（佐渡自然保護官事務所）が併設された．現状の，飼育繁殖から訓練までは新潟県，訓練から放鳥後の分析・観察は環境省という「管轄分け」に疑念を抱くこともあるが，環境省のみならず，佐渡市を初め，地元の方々の協力も不可欠なこの事業において，異なる立場・組織間におけるコミュニケーション能力と理解力の重要性を痛切に感じている．

トキの放鳥の目的は生態系の修復と保全の「可視化」であり，極論的には人間のための放鳥と言える．そのトキのために自分として何が出来るかを考えたとき，為すべきことは莫大である．